

3-12. 志々島大きな木プロジェクトの会（香川県三豊市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

志々島には最盛期には約 1000 人が住んでいたが、現在 20 人強にまで急速に減少し、半数は 80 歳以上の高齢者である。60 歳未満は二人しかいない典型的な限界集落である。しかし、志々島には両墓制の風習や島の規模にしては広大な漁業権を持つにいたった歴史等固有の文化・歴史がある。自然に目を向けると、推定樹齢 1200 年のクスノキの巨木（香川県指定天然記念物）があり、島外からも見学に来る人がいるほどであるが、これまで地元の人が組織的に案内をする体制もノウハウも無かった。

このような中でも、志々島を支援する島外のボランティア団体や個人が複数あり、集落内に志々島を紹介する写真の掲示、大楠までの案内板整備、大楠の草刈り等を手弁当で担ってきていた。近年は NPO 法人瀬戸内オリーブ基金が大楠の状態調査、島内の学習施設の整備、植樹等の支援をはじめ、これを機に地元「志々島大きな木プロジェクトの会」が発足している。「志々島大きな木プロジェクトの会」はここ 3 年間活発に活動しており、その活動はマスコミ等でも頻繁に取り上げられている。また最近行政からの支援も受けられるようになってきた。

このように人口は極端に少ないものの、決して孤立無援ではなく、自分たちで何とかしようという意識も高い状態にある。このような中、集落を維持するためにエコツーリズムの考え方使えないだろうかという機運が高まってきた。また、ヤギやミツバチの飼育等新しく産業を作り出すための試行も始まり、明るい兆しが見えてきている。資源・人材、ともに潜在能力は非常に高く、有効な指導があれば三豊市におけるエコツーリズムのモデルとさえなれるのではないかと期待がある。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 20 日（日）～1 月 21 日（月）
場 所	香川県三豊市志々島（会場：老人憩いの家／エクスカーション：志々島全域）
ア ド バ イ ザ ー	株式会社ツーリズムワールド 代表取締役 高梨 洋一郎 氏
参 加 者	大きな木プロジェクトの会 5 名、志々島出身者 2 名、ボランティアグループ 4 名、計 11 名
スケジュール・方法	※助言いただくにあたり、これまでの活動内容について事前説明を行った。 【1 日目】 島内エクスカーション 【2 日目】 講義、質疑、志々島の宝（資源）探し、事例紹介、



(3) アドバイスの内容

●島内エクスカージョン

島内を紹介しながら、先生が魅力と思える点や他の地域との相違点を指摘していただいた。特に、大楠のすばらしさは他の地域に負けない特筆すべきものがあるということだった。大楠を紹介するときには、写真では限界があつて無理ではないか。絵の方が紹介しやすいのではないか、またイベントとして絵画の会が有効ではないかとの指摘がこれまでにない視点からの指摘で大変役立った。

※出席者:志々島住民5人、島外近隣に住む志々島出身者2人、ボランティア4人の計11人が参加した。志々島住民5人は島内で活動に従事できるほぼ全員である。



●講義:「エコツーリズムの考え方・活かし方」

エコツーリズムの基本的な説明や各地の事例紹介から始まり、最終的に島の自然を守りながら、島の賑わいを取り戻すにはどうしたら良いかという目的の設定と合意形成まで、座学として実施した。講義は配布資料とパワーポイントを使って行われ、随時質疑を受けて補足説明をした。

●ワークショップ

島の資源を洗い出す方法として、宝探しシートとフェノロジーカレンダーの作成方法について説明があり、この内、宝探しシートを参加者全員で作成してみた。各自作成した内容を紹介しあい共有を図った。

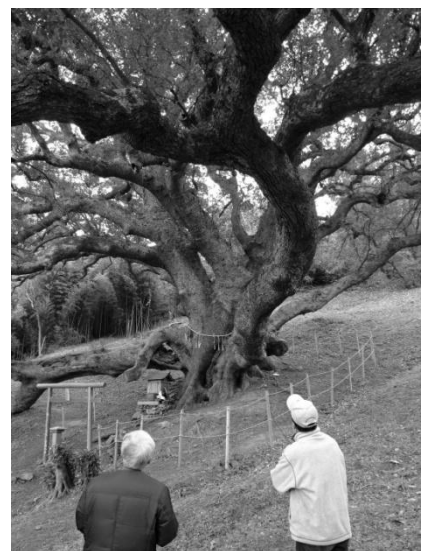
(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズムに関する講義・ワークショップ、ともに参加者のほとんどは初めての経験であり、講義では他の地域の事例紹介もあり、大変な刺激を受けた。直島の美術館よりも志々島の方が魅力があり可能性が高いとの談話もいただき意気が高まっている。

●今後の期待される効果

今年度中に、宝探しの内容を元にした島内案内パンフレットを制作する。2013年度には、備讃瀬戸地域で、第2回瀬戸内国際芸術祭が開催され、志々島は会場ではないものの、外部から人の流入が予想される。ゾーニングやキャリング・キャパシティの設定等で、島の生活を守りつつ、持続可能な方法でうまく外部の人との接点を持ち、志々島の発展につなげていきたい。



(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

宝探しの作業を通じて、いかに多くの資源が志々島にあったのか具体的に把握できたこと。ゾーニング、キャリング・キャパシティの考え方を知ることができたこと。これまでエコツーリズムには取り組んでいなかったので、すべてのことが役立った。

●その他感想

講習を受けたくても、島外に出ることがとても難しい状況にある。講師の方に離島まで足を運んでいただけたことは、大変に効果があった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ツーリズムワールド 代表取締役 高梨 洋一郎 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

巨樹・大楠の保存対策の一環として、島内一部住民と外部支援組織であるオリーブ基金によるエコツーリズムの活用に関する研究がスタートした段階で、「志々島におけるエコツーリズム」構想そのものを作成する準備期といえる。中核となっているUターン・シニア組数名の意識は高く、これに外部支援組織が呼応、定期的な会合を開くことにより、課題の抽出とその具体的な対策の実行をはじめている。

●アドバイス（講義等）の概要

（講義「エコツーリズムの考え方・活かし方」）

関係者の認識を共有するための講演形式による「エコツーリズムの基本と取組方」についてのプレゼンテーション。人口僅か 22 名、そのうち過半数が中期高齢者以上という限界集落状況にある志々島の再生・活性化を図るためには、自然・文化環境を保全しながら小規模観光を目指すエコツーリズム型観光が適合している旨の講演を他の事例を含めて 2 時間半にわたり提案した。

（志々島の自然・文化の宝探しワークショップ）

志々島の宝は、環境省の「巨樹・巨木データベース」全国第 29 位の「大楠」だが、その他の自然・文化資源については未発掘・未整理の状態にある。このため参加者全員によるワークショップ形式で「島の宝探し」を行い、資源の洗い出しを行った。今後「志々島大きな木プロジェクトの会」が中心となって、これらの資源を更に補足・整理し、フェノロジーカレンダー（季節暦）や資源マップに落とし込み、現状の資源概要を完成させる。

（志々島エコツーリズムの立ち上げるために必要な今後の取組に関する討論会）

志々島居住者、志々島出身島外在住者、外部ファン組織「志々島友の会」、オリーブ基金からなる参加者全員によるフリー・ディスカッション方式で、「志々島エコツーリズム」を立ち上げるための諸課題と解決の方向について話し合い、進め方に関する合意形成を行った。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

（豊かな自然・文化資源に恵まれながらも過疎化の進展で回復不可能な限界集落一步手前）

瀬戸内海随一の漁獲量を誇り島の頂上まで生花栽培で埋め尽くされていた志々島は文字通りの「黄金の島」であったが、瀬戸内架橋の大規模開発等による生態系破壊による漁業の衰退と産業のグローバリゼーションによる住民の離島により、かつて 1000 名を超えていた人口は僅か 20 数名までに激減、過疎というより島民だけでは再生が不可能な限界集落状態となっている。空家はそのまま放置され、崩壊寸前の民家も多く散見される。

しかし、圧倒的な存在感を持つ「大楠」は単体だけでも十分な資源価値を持つが、一時頂上まで花で埋め尽くされた豊かな土壌と多様な植生、ムール貝に代表される海の生物群等、陸海とも自然資源は全島にわたり今なお豊かである。加えて「両墓制」に代表される独特の風習や生活文化、更には映画「男はつらいよ」や「蒸気機関車」のロケ地として選ばれた瀬戸内海の内原風景が残る佇まい等、一口に言って「絵になる」島である。

（生活・環境保全型の小規模観光による地域再生へ）

瀬戸内海の一部の島で見られるような大型観光開発についての島民意識は総じて否定的であり、島の自然・文化環境を護りながら着実に持続可能な観光を興し、それによって島の活性化につなげたいという基本的な認識を共有、その中核となるUターン・シニアが「志々島大きな木プロジェクトの会」を立ち上げ、基礎的な研究活動に取り組み始めている。過疎の進行により島民自らの再生活動が可能なぎりぎりの段階にあると考えられるだけに、Uターン・シニア有志の登場は、志々島再生にとっていわば首の皮一枚が繋がったラッキーなできごとだった。

（中核となる組織づくりと今後の進め方について）

人口が20数名と極端に少なく、かつ中核となる島民数名以外はほとんど高齢者であることをからまず本格的な推進組織を立ち上げるためには、Uターン予備軍への働きかけや島外在住島民、更には「大楠」ファンを中心とする外部支援者や協賛企業、更には地元行政機関等への呼びかけを行い、島民プラス一定規模の協力者・実働部隊をつくりあげる必要がある。「志々島の楠を守る会」や「志々島の自然と文化を守る会」等の趣旨で多くのステークホルダーに参加してもらい、まずは「志々島エコツーリズム推進準備委員会」のような組織を立ち上げ、「志々島エコツーリズムの目指すもの」を明確にしたうえで、ロードマップや全体構想を含む基本方針の作成を進める。

電気水道をはじめとするインフラが整い最寄りの港から定期船や水上タクシーで20分の距離という恵まれた環境にあるとはいえ、宿泊施設はもとより食事処も皆無という状態では観光客を呼び込むことができても島の経済への貢献度はほとんどない。ガイドング事業だけでは活動そのものを支えることはできない。まずは行政をはじめとするステークホルダーを巻き込んだ全体構想づくりに向かっての取組が不可欠である。志々島が瀬戸内海におけるエコの島づくりのモデルになることを期待したい。

